（ああっ、急に抱きつくのをやめて背を向けるのって、もしかしたらまずい!? 悟、気を悪くしたりする!?）

そんな万梨愛の心配をよそに、悟が背後からそっと抱きしめてきた。羽と尻尾が軽く悟に触れるのがくすぐったい。羽が挟まれてつぶれないよう、悟が気を遣ってくれているのが嬉しかった。

「ありがとう、万梨愛……ごめんね」

「れ、礼を言うのは、ちゃんと契約がすんで、私の下僕になってからになさいっ。それに、謝る必要もないんだから……ひゃん！」

背後から抱きしめられたまま、耳に軽くキスをされた。

「万梨愛って、昔から耳とか脇腹、弱かったよね？ 子供の頃、よくくすぐりっこ、したもんね」

「な……ちょ、ちょっと悟、なにを……やっ、ダ、ダメ……あぁ……あふ……っ！」

尻尾と羽を触らせなかった仕返しなのか、悟は万梨愛の弱い部分に唇や舌、指を這わせてきた。昔からくすぐりに滅法弱かった万梨愛は、布団のなかでびくびくと裸身を震わせている。

「あっ……や、あはっ！」

もちろん悟もくすぐって万梨愛を笑わせようとしているわけではない。その舌や指の動きは、明らかに性的な興奮を呼び起こそうとするものだった。

（や、やだ、コイツ……なんでこんなに上手いのよ……あぁぁ、ダメ、声、抑えられない……っ！）

万梨愛の肌に、緊張の汗に加え、興奮による汗が混じりだす。汗ばんだ肌を優しく撫でられるだけで、万梨愛は身体中の血液が逆流するような感覚に襲われた。

「万梨愛の身体、ぴくぴくしてるよ」

「だ、だってアンタが……あぁぁ、やだ、そこ、触らないでぇ……っ」

脇腹を責めていた指が徐々に身体の前部へと移動する。激しく起伏する腹部を悟の少し冷たい手が撫でまわしていく。最初はくすぐったいだけだった悟の手は、万梨愛に妖しい興奮を呼び起こしつつ、今度は上へ向かって移動を開始する。その行き先はもちろん、

（あ……悟、私のおっぱい、触るつもりなんだ……）

恥ずかしさとともに、自慢のバストを早く触ってもらいたいという気持ちも湧きあがる。万梨愛は目を閉じて、じっと悟の手が乳房に達するのを待った。

（あ……あれ？）

ところが、あと少しというところで、悟の手がとまった。なんだか焦らされているようで切ない。

「ど、どうしたのよ？」

「い、いやだったら言ってよ、万梨愛。僕、初めてだからたぶん下手だし……その、緊張してるから、いろいろ失敗するかも……」

万梨愛が思っているよりもずっと、悟は緊張しているようだった。

（そっか、悟も緊張してるんだ。……だよね、どう考えてもコイツ、経験あるわけないし）

もちろん、万梨愛も人のことは言えない。セックスどころかキスの経験もないのだから。昔、ふざけて悟の頬に軽くしたことがあるだけだ。

（それにしてもコイツ、ちょっとヘタレすぎない？　こんなに美人の幼なじみが抱いてって言ってるのに、胸も触れないのっ？　それって若い男としてどうよ？）

万梨愛が悟に背を向けてからもう数分経ったが、悟はウエストの周辺を軽く撫でまわすだけで、なかなか次の段階に進もうとしない。

全裸でベッドに潜りこんだときは緊張と恥ずかしさで他になにも考えられなかった万梨愛も、次第に悟の意気地なさに苛立ちを覚えてきた。基本的にせっかちな性格と

いうこともあるが。

（ううぅっ、このヘタレ！　根性なし、甲斐性なしぃ!!）

軽く撫でられるだけとはいえ、弱い部分をしつこく責められれば、さすがに次第に性感が高まってくる。それが余計に焦れったさ、物足りなさを増長させる。

「あー、もうっ！」

「ま、万梨愛っ？」

我慢の限界を迎えた万梨愛は、いきなり自分の髪を結わえていたリボンをほどくと、

「ん！」

悟に背を向けたまま、まるで裏拳のようにそれを突きだした。

「これで私の両手を縛りなさい！……ほら、同じこと、何度も言わせないでよ！」

「あ、う、うん」

万梨愛の迫力に押され、悟は腰のあたりに重ねられた手首をリボンで縛っていく。

「えと……これでいいの？」

万梨愛に遠慮したのだろう、かなり緩い縛り方だったが、手の動きを封じこめるには充分だった。しかも、蝶結びアンド縦結び。

「こ、これならアンタでも……いくじなしの悟でも大丈夫でしょ？　わ、私、両腕が

使えないんだから……これなら私のこと、好きに抱けるでしょ？……」

少し震えた声でそう告げると、万梨愛は身体の向きを変え、ベッドの上にあお向けになった。両手は後ろで縛られているので、もう腕で裸身を隠すことはできない。悟が気まずそうに視線をはずす。

「こ、ここまでしても私のこと、抱けないの？　私のこと、好きだって言ったのは嘘だったの？」

「嘘じゃないよ！　僕は、ずっと……」

「なら、抱いてよ！　私、悟のこと、死なせたくないの！　そ、それとも……私が悪魔だから？　こんな醜い身体だから抱けないの？　好きだって言ったの、嘘なの!?」

昂りきった感情が、万梨愛の瞳から涙を流させた。ここまでお膳立てしても踏んぎりがつかない悟に対する苛立ちと、もしかしたら本当に悪魔である自分が拒絶されているのではないかという恐れが入り交じる。

「万梨愛……」

しかし、この気性の激しい幼なじみの涙が、悟の背中を大きくあと押しした。

「さ、悟……ん、んうぅっ!?」

いきなり悟が覆いかぶさってきたかと思うと、その直後、万梨愛の唇にちょっとか

さついたものが押しつけられていた。それが唇だと気づくのに数秒を要した。
（えええええー!? う、嘘、キス……私、キスされちゃってんのぉ!?）
急なことだったので、目をつむる余裕もない。そのため、万梨愛は唇を奪われながら、ファーストキスの相手の顔をまじまじと、それも考え得る最短距離で見つめることができた。
（うわ、うわわ……悟、顔、真っ赤だよ……あああ、ど、どうしよう……私、キスしちゃってるよー！）
それは時間にすれば数秒だったかもしれない。が、万梨愛にとっては数分、数十分にも感じられる瞬間だった。
「……」
今までに見たことがないくらい真剣な表情をした悟が、まっすぐに万梨愛の顔を見おろしている。
（あの唇が、さっきまで私の唇に触れてたんだ……）
万梨愛の視線は、つい、悟の唇にいってしまう。少しかさついた感触が妙に生々しくて、顔に血が昇るのが自分でもわかった。
「い、いいんだよね？」